

アニメで知る心の世界 8月

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品： 若おかみは小学生！ 劇場版

小学6年生である関織子は、突然の交通事故で両親を亡くしてしまったが、祖母が営む旅館の若おかみとなり、そこにいたユレーイ達との交流そして、旅館に訪れたお客さん達との交流を通じて、両親の喪失を受け入れ、成熟し、大人に向かうための Adolescence Process に突き進む契機となったと考えられる。そのことに関して6月7月と詳細に説明してきたと思う。

一方で思春期になって一旦収まっていたエディプス葛藤が出現するが、その葛藤に向き合い、折り合いをつけていくことは、Adolescence Process に進むには必要不可欠な要素である。そしてこのアニメで、おっことのエディプス葛藤の対象は秋野真月である。今回、おっこと真月がどのように出会い、関わり、関係性が変化していったのかを見ていくことを通じて、おっこの成長について考え、最後に神楽を舞うということはどういう意味があるのか？について考えていきたい。

秋野真月：花の湯温泉で一番豪華な旅館である秋好旅館のひとり娘。おっこのクラスメイトで、いつも豪華なドレスを着ている。その外見「ピンクのフリフリがついたドレス」からクラスでは、「ピンフリ」と陰で呼ばれ、我が道をゆく感じで、浮いた存在になっている。一方で成績も良く、常に秋好旅館のことを考え、努力家であり、おっこにとって敵わない存在でもある。

→おっこにとってのエディプス葛藤の対象

初めてのピンフリとの対峙

おっこが転校してきた日の休み時間にクラスメイトのよりこと話している時に「ピンフリ」の話題が出てきた後にピンフリがおっこの席に寄ってきて、自己紹介すると共におっこが住んでいる春の屋旅館を馬鹿にした態度をとり、自分の旅館がいかに素晴らしいかを自慢する。そこでウリ坊が彼女の顔にイタズラをしておっこは噴き出してしまう。

真月「何がおかしいの!？」という言葉におっこはクラス内でタブーとされている「ピンフリ」という言葉を使い謝る。そのやりとりに凍りつくクラス内。

真月「あなた！わたしをバカにしているの？」

おっこ「そ、そんなことないけど。ほら、その格好、ちょっと派手っていうか、浮いているっていうか」

真月「なんですか！？わたしは普通ってものに埋もれなくの！」

おっこ「でも時と場所にあった格好っていうものがあるんじゃない？」

真月「それが普通ってことでしょ！わたしはこの社会に、いえ、宇宙に衝撃を与えたいの！」

ここでおっこは真月と対峙し、クラスの女子達から勇気あると言動だと賞賛され、クラスの仲間に受け入れられる。ある意味、ピンフリにイタズラしたウリ坊が結果として、その橋渡しをしたとも考えられる。そしてそれはエディプス葛藤への対峙への橋渡しとも考えられる。

3. 神楽を舞うということはどういう意味があるのか？

神楽：日本の神事において神を奉納する為に奏される歌や舞

→神座（かみくら）が転じたもの

その神座で真月とおっこが一緒に踊ったことが大きなポイントと考えられる。

秋野真月：対峙しなくてはならない、敵わない相手＝エディプス対象

そして真月との神楽の練習は通過儀礼を受ける準備段階とも考えられる。

1) 水領との出会いの後、神楽の練習

その後徐々にユーレイ達が見えなくなってくる。

→徐々に喪失を受け入れ、大人に一步近づきつつある。

神楽の練習当初、完璧にこなす真月の一方でうまく踊れないおっこ。そこに苛立

ちを隠せず、怒りをぶつける真月

真月「いつまでこんな調子なの！？この御神楽はね、花の湯温泉にとってずっと

伝えていかなきゃならないたいせつなものなのよ！」

→通過儀礼を受ける覚悟ないおっこへの叱咤。

この当時は木瀬一家との出会う前で、おっこ自身がこれまでの生活から離れ、両親と別れを告げ、花の湯温泉の若おかみとして生きるという覚悟がまだできていないということでもある。

その後おっことピンフリは「バカおかみ」「ピンフリ！」とお互い犬も食わないような言い合いに発展するが、思春期の子供に親が分別なくぶつかり合う光景のようにも感じられる。それは依然敵わない対象(エディプス対象)であるが、徐々に立場が近づき、対等な関係になろうとする思春期の心の揺れ動きのようにも感じられる。

2) 秋野真月との対峙

木瀬一家の件で、旅館で提供した食べ物に対してほとんど食べてくれないことに旅館の従業員達は悩み、おっこは秋野真月が以前話していたことを思い出し、秋野真月のいる秋好旅館に向かい、彼女と向き合う。

おっこ「真月さん」

真月「なにか御用かしら。わたし忙しんだけども。」

真月の部屋の壁に少女の絵が飾られている（美陽の絵と思われる。）

真月「……で、なに？」

おっこ「あ、あの、さっきのことは謝るわ。あたし、稽古で散漫だったし、あなたの言っていること間違っていないもん。」

お神楽の稽古でおっこがうまく舞うことができず、真月におっこがお神楽を舞う覚悟がないことを厳しく指摘されたことを指している。

→おっこ自身がこれまでの生活から離れ、両親と別れを告げ、花の湯温泉の若おかみとして生きるという覚悟がまだできていないということでもある。

真月「(ため息をつきながら) ……で？」

おっこ「……真月さんに力を貸してほしいの。どうしてもお客様に満足していただきたくて！」

真月「あなたに意地ってものはないのかしら。」

おっこ「あ、あるわよ！でもお客様に喜んでもらう方が大事だもん！……真月さんだってそうするわよ！」

真月「さあ、どうかしらね。」

そこで、真月の横の電気スタンドがパッと消える。

(おそらく美陽の仕業だろう)

真月は少し動揺し、諦めたようにおっこに協力し、いろいろ教え、花の湯牛とレシピを提供する。

真月「夢をみることができれば、それは実現できる by ウォルト・ディズニー」

【考察】

上記のやりとりで、真月は当初、意固地になっていたが、美陽の促しで素直におっこと関わり、手助けをする。おっこがお客さんを満足させるという若おかみとしての職務を全するという大人への手助けを真月がしたと考えられる。そしてその橋渡しを美陽し、このやりとりを通じておっこは秋野真月というエディプス対象にぶつかり合い、向き合い、Adolescence Process に進み始めたと考えられる。

これまでおっこはユーレイ達と戯れて、両親の幻影に抱かれる。それはまさに夢をみていたのだと考えられる。そして鈴鬼が連れきたお客さん達の苦悩を受

け入れ、そして情緒的に交流した。そしてエディプス対象である真月と対峙することで両親の幻想から離れ、花の湯温泉という現実世界に自由に創造的に生き抜くんだという覚悟が、おっこの中に出てきたという暗示とも考えられる。秋野真月のウォルト・ディズニーの引用はそのことを示唆しているようにも感じられる。

そのように両親の幻想から離れ、花の湯温泉という現実世界に生き抜くんだという覚悟が出て、Adolescence Processに進み始めたからこそ、お神楽の日に二人の息があった舞が踊れたと考えられる。

そして現実を生きていく、受け入れていくんだということ、それはユーレイ達、移行対象とのお別れを意味するものであり（「あの花」でめんまを成仏するように）、鈴鬼が出てきて、「お別れの日が決まりました。」と言ったのだと考えられる。花の屋に帰る車の中で、鈴鬼が出てきて、「お別れの日が決まりました。」
「お神楽の日に、ウリ坊さんと美陽さんはこの世を離れて、天に登ります。」という。

3) 神楽を舞うこと

神座：「神の宿るところ」「招魂、鎮魂を行う場所」

神楽を舞う前に「起源の湯」でおっこと秋野真月がお清めの入浴をするシーン

真月「……あなた、前にユーレイに話してたわよね。 実はね。わたし、声だけ聞いたことがあるの。 失敗したりお客様に叱られたりしたときに『真月がんばって！』『真月なら大丈夫！』って（そこで美陽の幻影がおっこにだけ見える）私にはね、私が生まれる前に亡くなった姉がいるの…あれは姉の声のような気がして…。 会いたかったな。」

→おっこの心の成長、そして真月ときちんと対峙する中で真月がおっことを認めたことであり、子供が一人前の大人になる一歩を踏み出したことを父親が認めたことに似ているように感じられる。

神座に神々を下ろし、巫女が人々の穢れを祓ったり神懸かりして、人々と交流する神人一体の宴の場。その中で真月とおっこは一緒に舞い、その中でウリ坊と美陽はこの世を離れて天に昇っていった。

→両親を失ったという喪の作業の遂行であり、大人になる為の通過儀礼を受けた。